留学生・日本人学生・地域社会三者間異文化交流の試み

（留学生指導部門報告）

留学生センター　小　林　基　起

鹿児島大学留学生は、現在40数カ国300名あまりを擁するが、留学生と日本人学生との日常的接触は一部を除いて少なく、双方ともにより深い接触を望んでいる。しかしながら現状は、異文化への興味は抱きながらも、言語や習慣の違いによる困難性への思い込みによる障害から、深い体験の交流を築き上げるにはいたっていない。同様のことは地域社会との交流においても顕著である。個々の団体や組織が独自に単発的なイベントは行っても、継続的で日常的な深化は残念ながら不十分である。留学生の活躍は地域社会の活性化にとっても重要であり、多角的な取り組みが期待されている。

このような現状を打開するため、留学生指導部門では「多国籍合宿」を企画実行し、その成果を継続し発展させるために「世界を広げよう会」などの日本人学生による留学生サポート組織を立ち上げ、継続的で日常的な深化を試みた。以下、それらについて概略を記す。

（1）「多国籍合宿」について

「多国籍合宿」は2001年5月19日（土）から20日（日）まで一泊二日、鹿児島大学留学生センターおよび鹿児島大学留学生会（KUFSA）主催で行われた。40名を超える留学生及び60名を超える日本人学生と地域住民、合計100名を超える人々が参加した。実施にあたって繰り返された実行委員会の準備会議の中で、コミュニケーション言語ひとつをとっても、日本語になったり英語やその他の外国語になったり、また日本語に戻ったりと言語の往復があった。留学生にとっては研究室での専門日本語や教室日本語を超えた、日本人・日本文化との生きた日本語・日本文化との修練の場となった。また、日本人にとっては外国人に理解される日本語のありようを考えながら言葉を選ぶという訓練が必然的に課され、日々言葉と異文化への認識を新たにする機会となった。非母語話者との対話には、いかなる配慮が必要であるかという学習が、無意識のうちに継続されていた。これは、たくまずして日本語教育のありようを考えさせる契機となり、そこで生じた問題意識は日本語教育の現状に還流されるべきものが多くあった。このことは教室での日本語教育の改善にも寄与し、新たなる教授法の発展を促すことになろう。

さて、実施にあたっての十数回の会議では、多国籍合宿を充実した内容にするための議論が繰り返された。単発的なイベントに終わらせないための知恵を出し合い、7つの分科会と全体会2回、夕食後の多文化音楽と舞踏の夕べ、また多種目のスポーツ交流が企画された。

留学生は17カ国42名の参加があったが、特筆すべきは留学生どうしの異文化交流、つまり価値観

の相違による意見の対立の現場に60余名の日本人学生と地域住民が参加し、異文化交流の臨場感を共有できたことであろう。

中南米やアジア・アフリカ諸国等、17カ国の留学生には文化と価値観の多様性が当然のことながら存在するが、日頃は遠慮して自らの価値観を主張しようとはしない留学生も、前後左右を見、参加者相互の人柄とやりとりとを見定めながら安心してくると、だんだんと自身の価値観を主張し始める。主張し始めると17カ国いれば17通り、同国人内部でも同じ意見とは限らないので、実に多様な意見が出て興味深い。それが論議を深めてゆくに従い、だんだんと意見が集約されてゆく。異文化相互が歩み寄っていくのである。もちろん日本人との意見の相違もあるが、それらもいずれは集約されてゆく。その過程が実に異文化交流の醍醐味なのであるが、そのおもしろさを共有することの意義深さを、多くの参加者が体験できた。

これは異文化どうしの共存・共生の困難性と重要性への認識の深まりに他なるまい。異文化どうしの対立が、共存・共生へと変化してゆく過程を実感するのである。

「多国籍合宿」はこのおもしろさに気づいた故であろうか、夜を徹して語り合うグループが多数でき、翌日のスポーツイベントは疲れのためか不調ではあった。しかし「多国籍合宿」の継続への意義は多くの参加者に確認され、その後の組織的、また個人的なつながりの輪へと広がっていった。

（2）「カントリー・トーク」について

また他方、以前から留学生は滞在国日本のみならず、留学生間に互いの国への無理解のあることに気づき、その溝を埋めるために各国代表者が毎月交代で「カントリー・トーク」という、留学生による留学生のための自国紹介のレクチャーを留学生会館で開いていた。

しかしこの多国籍合宿を契機に、カントリー・トークの集会に留学生のみならず、日本人教官・学生及び地域住民を参加させることの意義があらためて意識された。留学生に日本人に向けて発言したいことがあるのは当然のことである。この「多国籍合宿」が留学生にとっては、日本人への働きかけへの意義と可能性と方法に気づかせることになったのである。

その後、カントリー・トークは隔月の公開講座となり、日本人教官・学生・地域住民を招き討論の輪を持つこととなり、現在も継続されて毎回盛況である。2001年10月のパキスタンのカントリー・トークでは参加者が60名を超えたが、時局柄、説明後の討論が盛り上がり、討論に参加した日本人や各国聴衆の興奮を鎮めるのに司会者は苦労をしていたが、それらの発言も鎮め方も、お国柄により主張と表現とが異なり、異文化交流の臨場感が殊に興味深かった。

多国籍間に横たわる発想の違いの生のぶつかり合いは、日本人にとっても臨場感に満ちた現場に立会い参加する機会となり、きれいごとで表面的に流れがちな国際交流にとって新しい息吹を与え、平和共存への深い理解を切実に求める。この切迫感は未体験のものであり個々人の国籍を超えたつながりを促す。このような試みは今までにない独創的なものがあり、大切に育てたいものである。

しかしこのカントリー・トークにも、会場借上げ費や運営費、交通費等の経済的な困難が高まってきている。支援者を募り、地域との結びつきを強め自立をはからねばなるまい。

（3）「世界を広げよう会」について

「多国籍合宿」を契機として、留学生のサポートを目的とする日本人学生の任意組織ができた。「世界を広げよう会」は多国籍合宿に参加した学部の日本人新入生6名を中心として始まった。昨年10月に発足し、毎週金曜日4時から7時まで総合教育研究棟4階多目的ホールを借りて、留学生と日本人学生との交流会を行っている。参加資格は特になく地域住民も参加可能である。活動内容は留学生の日本語学習の手伝いや日本の遊びの紹介、留学生による太極拳や歌やダンスなど外国文化紹介など、毎回工夫して行われている。時には留学体験報告会と称し、日本人留学体験学生や現在の鹿児島大学留学生などに日本へ来て感じた海外留学の意義などを話してもらうイベントなどを行っている。

日頃は日本語が全く初めての新規入学留学生の日本語学習の手伝いをしているが、留学生の中には日本語はもちろん英語も通じない人もおり、コミュニケートには大変な苦労をしている。最初のうちこそ先輩留学生に通訳をお願いしても、そのうち自分たちだけでやらねばならなくなり、ずぶの素人である彼女らは鍛えられた。しかし、言葉なしのコミュニケートにもだんだんと慣れ、習熟してくる。大切なことは外国人から学ぶ姿勢を持たせることである。日本語を教えるのではなく、外国人から学ばしてもらうという姿勢が学習者を喜ばせ、会に足を向けさせる動機となる。

よく会に参加してくれた日本語研修クラスの学生（新規入学留学生、日本語力ゼロ）たちは、ほとんどが大学院進学を前提とした社会人経験者であり、年齢的にも経験的にも会の日本人学生の大先輩に当たることも幸いしたのであろう。また、しばしば来てくれた他の留学生たちには、日本人を育てることに一肌脱いでやろうとの、ありがたい気持ちもあったであろう。

会のメンバーは辛いなかにも喜びを見いだし、なんとか半年を経て見かけよりもたくましくなり、ねばり強くなった。2002年度5月に予定されている「第二回　多国籍合宿」の準備には、めざましい活躍をしている。

（4）留学生サポート活動について

鹿児島大学には、すでに認知された留学生サポート活動として「留学生会館チューター」と「個人チューター」とが制度としてあり、学生から選ばれたチューターは、それぞれ留学生課と各部局が任命し経費が規定により支出されている。

留学生会館チューターは現在4名が選ばれ会館に住み、留学生と起居を共にして主に生活面での問題処理に当たり、会館の管理運営の補助をしている。いずれ6名に増やす予定がある。

個人チューターは各部局が選出し、主に新規入学学部生と大学院生とに最初の一年間つけられることになっている。

チューター制度にはいろいろの問題が残されているが、ここでは個人チューターについて述べる。

チューターの基本的仕事のうち生活面のサポートに関しては、学部生・大学院生ともに専攻が違っても共通する部分は多い。しかし、その学業面のサポート活動は学部生と大学院生とでは違いがあ

り、また学部や専攻によっても大きく異なっている。

大学院生の個人チューターについては、ほとんどが留学生の所属する研究室から選ばれ、ある程度その機能を果たしてきたと考えられるが、残念ながらチューター相互の連絡組織がなく、ノウハウの蓄積と伝達も不充分であった。留学生と個人チューターとの相性が悪かったりすると互いに不幸なことも起こりうるので、チューター相互の連携や情報交換の機会が準備されねばなるまい。

また学部留学生の個人チューターについては、さらに問題は複雑である。日本の大学制度への理解不足は科目登録にも困難を生じ、数学・理科・社会などの基礎的知識も出身国によって異なっている。特に英語力についての非英語圏出身者の能力差は顕著である。このようにさまざまで異なった背景を持った留学生にふさわしい個人チューターを発見することは容易ではない。理数や人文・社会科学、さらには英語までを一人でフォローできる個人チューターは皆無であろう。

早急にチューター連絡会を発足させ、数学や英語等、留学生の個々の要求に応じたフォロー体制を整備する必要がある。熱心で真面目なチューターほど膨大な仕事量と責任感とを抱え込み、聡明なチューターが徒労感や無力感を覚えるような状態は避けなければならない。チューター各自が重い負担を感じないで、無理なく自分の長所や特性を発揮できるようになれば、留学生との交流もおのずと深まるものと期待できる。これらは留学生受け入れ教官への手助けにもなることであろう。

まずは連絡網をはじめとするチューター連絡会を発足させ、以下のことからはじめさせたい。

・チューターの仕事内容と意義（権利と義務・チューター報告書の提出等）
・留学生の個人データの整理（アンケート等）
・学習サポートの種類と頻度
・留学生受け入れ教官への情報提供
・生活サポート、学習サポートの役割分担
・定期的なチューター連絡会の開催

しかしながら留学生を取り巻く状況は厳しく、とりわけ私費留学生の中には授業料減免が受けられず奨学金も受給できないものもおり、そのような留学生は生活と授業料のためのアルバイトの必要から授業にも十分に出られないという実態が一方にはある。

また、英語力や理数・人文社会科学等の学力のばらつきの問題性はすでに述べた。

これらの複雑な問題と困難とを解決するには個人チューターの力のみでは不可能であろう。個人チューターを支えるサポート組織が必要となると予測される。強力なサポート組織を作らねばなるまい。「多国籍合宿」や「世界を広げよう会」などの活動が、このサポート組織を支える母胎となろう。

（5）「第二回　多国籍合宿」について

「第二回　多国籍合宿」は2002年5月18･19日に予定されている。鹿児島大学のみならず他大学や行政および地域にも参加を呼びかけた。

昨年の反省として、継続性・持続性の不足、分科会の内容の深化不足、前回経済的理由で参加できなかった多くの私費留学生に参加を促す、ことなどが挙げられた。どれも簡単に解決できることではないが、より深刻な問題の解決をはかるべく努力し、その成果を広く伝え、支援者を募り、地

域との結びつきを強める契機とすることができればと考えている。地域全体が留学生のサポート組織となることが最終目標なのである。

日本人が不得意とされてきた、外国人から学ぶ姿勢を養うトレーニングの場とすること。

鹿児島で留学生どうしが日々積み上げてきた平和共存への営みを学ぶ場とすること。

今回の多目的合宿の目標は以上二点に集約されよう。

留学生サポート体制が充実し、真の国際理解が今後更にすすむことを願っている。